

台湾から分子研の研究文化に期待する

増原 宏 台湾・国立交通大学理学院 講座教授



北大名誉教授、数学者、三宅敏恒さんの筆による

研究者はオリジナルな仕事をした
い、いい論文を書きたい、結果として
優れた研究者として認められるだろう
と願って日夜努力している。いわゆる
いい論文は高いインパクトファクター、
多い引用回数などの数値で格付けさ
れ、研究者個人はもちろん大学や研究
所のランキングに使われる。この数値
を高くせよという方策が、世界中の大
学、研究所で推進されているが、これ
は世界企業が経営効率を上げ、業績を
争うのと似ている。自動車会社でい
えば、燃費、環境負荷で競い、コストを
下げ、販売台数のランキングが話題と
なる。ある国内メーカーが不振に陥
った時、外国人社長がコストカッターと
して登場し、V字回復を果たしたとい
う話は有名である。その人曰く、目標
を掲げ、なすべきことを具体的に指示
し、無駄を徹底的になくさねばなら
ないが、そのためにはクリアな数値
を示すことが重要である。歴史、言語、
習慣、社会、文化が違う多国籍企業では、
目標を数値化することがキーポイント
であると。

私は阪大応物を退職後台湾は新竹
市にある国立交通大学で阪大時代と
さほど変わらぬレベルの研究環境を
与えられた。Optical Manipulation in

Chemistryの分野を開拓すべく努力し
ているが、先人はおらず、定型はなく、
仕事の似通った参考論文は当初見当
らなかった。「私たちは何を研究すべ
かを研究している」という段階にある
というのが私たちの判断であった。こ
の新現象探索の研究において性能、分
解能、速度、効率などの目標を数値化
できなかった。結果として習慣、社会、
文化の異なる台湾の研究者一般に、私
たちの研究をいい研究だと十分説得は
できていないと感じている。自動車会
社なら倒産するところである。しかし
ながら10年以上にわたって台湾政府と
国立交通大学は、私たちの研究をサポ
ートしてくれている。台湾の研究文化は
このような探索研究を受け入れる懐の
深さがあることを示している。

翻って日本ではどうだったか。私たち
のOptical Manipulation in Chemistry
の発想を持ち、その研究を実践する機
会を与えてくれたのは、JSTのERATO
プロジェクトであった。その後20年
にわたってJSPSとJSTは私たちの研究
を支援してくれた。オリジナリティー
の高い研究を試みよ、それはいい論文
を作り、優れた研究者を生む、その研
究アプローチを可能にしてくれたのは、
日本が積み上げてきた歴史、習慣、社

会に根ざす研究文化であると感じてい
る。

日本の大学にも、大学附置研究所に
も、分子研にも、独自の研究文化が育
っている。研究文化は時には数値目標の
達成、それによるランキング競争に短
期的にはマイナスとなるが、オリジナ
ルな研究には不可欠のものである。目
標を数値化することで習慣、社会、文
化の違いを乗り越えようとする多国籍
企業とは異なり、数値化しないで歴史、
言語、習慣、社会、文化の多様性を研
究に反映することが、オリジナルな研
究と豊かな人材を育てると考えている。
最近分子研と国立交通大学理学院との
共同研究体制が整い公式交流が始ま
った。分子研の持つ研究文化が台湾で
広く認識され、さらに数値目標に敏感な
アジアから世界に広がっていくことを
期待している。

ますはら ひろし

私は阪大応物を定年退職後、2008年より台湾の
新竹市にある国立交通大学で研究室を持つ機会を
いただき、現在杉山輝樹副教授、工藤哲弘助理研
究員と運営している。スタッフは日本人だが、秘書、
博士研究員2人、博士院生4人、修士院生10人は
全員台湾人である。台湾において台湾人院生を相
手に、日本式に研究室を運営する中で、習慣、社会、
文化と科学の関係を考えさせられている。